

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25285050

研究課題名(和文) サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史

研究課題名(英文) Wars and Border Shifting in Sakhalin Island in the First Half of 20th Century

研究代表者

原 暉之(HARA, Teruyuki)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・名誉教授

研究者番号：90086231

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀初めサハリン島全体がロシア領だったが、日露戦争後南半分が日本領となり、1945年の日本の敗戦まで、日露それぞれが南北に分かれて島を統治し、開発を進めた。このような国境の変遷をみた20世紀前半のサハリンについて、その地域史と周辺地域(北海道やロシア極東、中国東北部など)との関係、さらに国際関係との関わりについて、政治、経済、産業、国際関係、社会、教育、民族などの多方面から、日露両方の史料を発掘して、個別研究を積み重ねつつ、それを踏まえた歴史の全体像の提示を試みた。特に、北樺太保障占領、日本の植民地としての南樺太および敗戦後のソ連統治下の南サハリンの状況について多くを解明することができた。

研究成果の概要(英文)：Sakhalin Island belonged to Russia at the beginning of 20th century, but its South half was transferred to Japan after the Russo-Japanese War (1904-1905), thereafter Russia and Japan governed and developed each part of it as its integral part of "empire". We studied such a border region's regional history multidisciplinary, analyzed not only its inter regional relationship, but connection with neighbor regional such as Hokkaido, Russian Far East or North East China, and in the context of international relations. We have explored much historical sources in Japan and Russia, accumulated much research papers, and tried to picture total historical process. We had much contributed to the study of Japanese occupation of North Sakhalin (1920-1925), the position of South Sakhalin in Japanese Empire system, and the beginning of the Soviet rule in South Sakhalin.

研究分野：西洋史

キーワード：サハリン 樺太 植民地 シベリア出兵 保障占領 引揚げ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、科学研究費補助金 基盤研究(B)「国境の植民地サハリン(樺太)島の近代史: 戦争・国家・地域」(代表: 原暉之, 2010~2013年度)を発展・継承する形で、その最終年度から開始されたものである。

この研究が開始された背景としては、これまでのサハリン・樺太近現代史研究は、領土をめぐる外交交渉に重点がおかれ、ややもすれば地域史の視点が等閑視されてきたこと、およびソ連崩壊後、ロシアとの研究交流が可能になり、日ソ双方の史料と視点を取り入れることが可能になったが、その条件を十分生かすに至っていない現状への反省もあった。

旧科研においては、日本史とロシア史の研究者が学際的に協力あって仕事をする体制をつくり、その成果として論文集『日露戦争とサハリン島』(北海道大学出版会, 2011年, 414頁)を世に問うことができた。

20世紀初頭の、サハリンがロシア領の流刑植民地だった時代から、日露戦争(1904-1905年)の末期に日本が侵攻して一時は全島を掌握し、ポーツマス条約によって北緯50度線以南の割譲を受け、日本領としてその統治が始まる前後の時期を扱ったこの論文集は、数少ない日本におけるサハリン/樺太史に関する本格的な歴史研究書として、学界と社会に貢献するところがあつたと自負している。

この後、1945年の第二次世界大戦によって日本がサハリン島の領土を失うまでは、北緯50度線を境に、北はソ連領、南は日本領だったわけだが、それぞれ、その歴史的展開が十分に研究されているとは言い難く、また、国際的な視点からそれらに関連させて総合的に理解する視点が必要だと意識された。

すなわち、南半は大日本帝国の一部をなす植民地樺太として開発され、北海道との密接な関係を持ちつつ、漁業中心の経済から、木材、製紙、石炭の供給地として発展を遂げていくことになる。

ロシア・ソ連領だった北半は、流刑植民地制度の廃止後、1917年に始まったロシア革命と内戦、1918年に始まるシベリア出兵と日本軍による「保障占領」(1920-1925年)を経て、ソ連によって開発されることになる。

この「保障占領」期の研究は非常に立ち遅れていて、日ソ関係史上の空白部分になっている。また、「保障占領」終了後の北サハリンの状況についても、村上隆による石油開発史研究を除き、学問的な研究はごく少ない。

さらに、第二次大戦中、およびその直後、ソ連統治下にあった南サハリンの状況についても、回想録等は各種出版されているが、研究は多くないのが実情であり、旧樺太引揚者の方がまだ生存されているいまのうちに、そうした空白を少しでも埋める必要が痛感され、本研究を企画・組織することになった。

2. 研究の目的

本研究は、(1)日露戦争期(1904-1905年)。サハリンはこの主戦場ではなかったが、その末期に日本が侵攻し、全島を占領。ポーツマス条約によって北緯50度線以南の割譲を受け、日本の植民地とした。

(2)ロシア革命(1917年)からシベリア出兵、北サハリン「保障占領」(1920-1925年)を経て、日ソ基本条約(1925年)によりソ連と国交を成立させるまでの時期。

(3)第二次世界大戦とその後の南サハリンでソ連統治下に日本人が暮らした時期。

以上の3つの時期に注目し、20世紀前半のサハリン(樺太)史を、地域内、地域間、国家間の重層的視角から、通時的かつ共時的に検証し、地域内の変容、隣接する地域と国際政治との関係性を総合した地域史像を構築しようとしたものである。

3. 研究の方法

本研究は、とりあえず前作『日露戦争とサハリン島』の続編として、『1920年代のサハリン島(仮題)』を刊行することを目標の柱とし、各分担者が個別に研究を進めるとともに、予定原稿を持ち寄って研究会を重ねることで進めてきた。

また、日本側の史料を調査するだけでなく、ユジノサハリンスク、ウラジオストク、ハバロフスク、モスクワなど、ロシアの文書館史料の収集と分析に努めた。

また、サハリンにおいて開催される歴史系の研究集会に積極的に参加し、その記録集に日露双方が寄稿しあうことで相互の交流を促進し、国際的な成果の共有をはかった。

4. 研究成果

本研究の期間中に得られた大きな収穫としては、神長が『北洋の誕生』(2015年)を出版したことが挙げられる。サハリン周辺の沿岸漁業から出発した「露領漁業」が、ロシア革命とシベリア出兵を経て、「北洋漁業」としてカムチャッカ方面に展開されるまでが跡づけられ、戦後の日ソ漁業交渉につながる歴史の糸がここに示された。

また、塩出は『越境者の政治史』(2015年)を著し、日本統治期の南サハリン(樺太)に移住した日本人の政治参加を、北海道や朝鮮・満州等と比較し、戦前日本の帝国システムと日本人の移動の中にこれを位置づけようとした。

この他、田村は、日本統治期南サハリンにおける先住民族について、池田は樺太庁の治下の南サハリンにおける教育施策について研究を深め、井竿は、日本の対外進出に関係した日本人の国家による被害補償や、近隣諸国との歴史認識の差、シベリア出兵の国際的意義について成果を発表し、ウルフは、第二次世界大戦期のスターリンのアジアについての

構想について、その後の冷戦につながる大きな視点から展望した。三木は日本の植民地経営における鉄道輸送など交通体系の問題を深めた。パールイシェフは、ロシア革命期前後の日ロ関係について、両国の文書館史料を駆使して多面的に研究を深め、スタハーエフ商会の実態や三菱との交渉など新しい事実を多く発掘した。井澗はサハリンに近いアムール河河口近くの町に生じた尼港事件と、それに続いた北サハリンの日本の軍政の実態について、当時のジャーナリストの残した記録や、ウラジオストクの公文書館に残る関係文書によって明らかにした。原は、ロシア革命・内戦期の極東ロシアに住んだ日本人の状況について、新しい研究を発表した。竹野は、北サハリンの「保障占領」期、どのような人々がそこに入り、どのような経済活動を営んだかについて先駆的な業績をあげたほか、第二次世界大戦直後の南サハリンにいた日本人の状況について、多くの史料を拾い上げて明らかにした。兎内は、第二次世界大戦直後のソ連による南サハリン統治についてロシア側資料によって明らかにしたほか、第二次大戦期の米ソ関係について、宗谷海峡と間宮海峡はアメリカからソ連への物資提供のメインルートだったが、日本はこれを十分に察知してなかったことを示した。

以上のような個別研究とともに、それを総合した歴史像を提示することが、本研究の大きな目標であった。

これについては、研究期間の最後の時期に樺太連盟の記念事業として原・天野編著『樺太四〇年の歴史：四〇万人の故郷』（2017年）を刊行することができた。この本は、4人の執筆者全員が本研究関係者であるが、これまでの日本領樺太に関する個別研究の集大成を超えて、新しい視点を随所に盛り込んだ意欲作であり、これまで適切な概説書がなかった日本統治時代の樺太史について、第一に参照すべき書籍を成果として提供できたと考える。

もともと本研究では、1920年代のサハリンについて、その南北両方を全体的に扱った論文集を出版することが目標であった。ロシア革命とシベリア出兵、北サハリンの「保障占領」が輻輳する複雑な時期で、研究の空白部を埋める意義が大きいと考えていたが、残念ながら研究期間中には刊行に至らなかった。

現在、論文集の構成や執筆分担が確定し、半分ほどの原稿が集まっている段階である。残りの原稿を集めるとともに、すでに提出された分のブラッシュアップを行い、来春の刊行を目指して作業を進めている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 35 件）

兎内勇津流「第二次世界大戦期サハリン周辺海域の航行問題」『ロシア史研究』99号、査読あり、2017(印刷中)

井竿富雄「裕仁皇太子の宇部訪問と報徳会、

一九二六年」『山口県立大学学術情報』10巻、査読なし、2017, pp. 1-12.

田村将人「樺太アイヌ村落の生活および教育に関する視察復命書」『北海道博物館アイヌ民族文化センター紀要』2巻、査読なし、2017年, pp. 104-134.

池田裕子「樺太最初の中学校創設：中川小十郎の役割に注目して」『社会システム研究』33巻、査読あり、2016, pp. 1-26.

池田裕子「樺太拓殖学校の再編」『日本の教育史学』59巻、査読あり、2016, pp. 58-70.

井竿富雄「誰に向かって何を語るか：中国で刊行された日本語刊行物 2014-2015」『山口県立大学学術情報』9号、査読なし、2016, pp. 1-12.

井澗裕「日持上人の樺太布教説をめぐって：帝国日本における北進論の特質と影響(1)」『境界研究』6号、査読あり、2016, pp. 81-111.

神長英輔「第1次五カ年計画期(1928-1932)のソ連極東漁業における日本人労働者：頻発する労働争議とその背景」『新潟国際情報大学国際学部紀要』1巻、査読なし、2016, pp. 89-102.

三木理史「満鉄安奉線改築工事とその資材輸送」『鉄道史学』34巻、査読あり、2016, pp. 15-32.

三木理史「1920年代南満洲鉄道の旅客輸送：漢人出稼者輸送との関係を中心に」『地理学評論』89巻5号、査読あり、2016, pp. 234-251.

三木理史「『満洲国』期の農産物鉄道輸送：満鉄の路線拡大との関わりに注目して」『歴史地理学』58巻3号、査読あり、2016, pp. 1-23.

Miki, Masafumi. A Study of Karafuto in the Sea of Japan Rim Regions after the Russo-Japanese War by Considering Reports of the Vocational Inspection Team from Niigata Prefecture, Japan. "Geographical Review of Japan. Series B" Vol. 88. 査読あり、2016. pp. 80-85.

天野尚樹「北門の鎖鑰の向こう側：流刑地サハリンと「農民」たち」『Arctic Circle』96号、査読なし、2015, pp. 4-9.

池田裕子「裕仁皇太子の稚内行啓」『北海道・東北史研究』10号、査読あり、2015, pp. 49-66.

井竿富雄「第一次世界大戦による被害に対する追加救恤、一九二九年」『軍事史学』50巻、査読あり、2015, pp. 417-433.

竹野学「南北樺太への移民政策：官と民のすれ違い」『別冊正論』25巻（ニッポン領土問題の原点!!「樺太-カラフト」を知る）、査読なし、2015, pp. 56-67.

田村将人, 鈴木健治「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所における樺太旧蔵書について(史料紹介)」『北海道・東北史研究』10号、査読あり、2015, pp. 1-8.

三木理史「幻の日本によるサハリン島一島支配：保障占領期南・北樺太の開拓」『歴史と地理(日本史の研究)』682号、査読なし、2015, pp. 1-17.

三木理史「1920年代南満洲鉄道における撫順炭輸送」『アジア経済』56巻1号, 査読あり, 2015, pp. 115-137.

三木理史「「棄景」の語る樺太産業と鉄道の関係誌：未完に終わった開拓・殖産の実像」『別冊正論』25巻(ニッポン領土問題の原点!!「樺太-カラフト」を知る), 査読なし, 2015, pp. 68-79.

②①天野尚樹「書評 三木理史著『移住型植民地樺太の形成』」『史林』97巻1号 査読なし 2014, pp. 244-250.

②②池田裕子「樺太の先住民教育」『Arctic Circle』93号, 査読なし, 2014, pp. 4-9.

②③井竿富雄「満州事変・第一次上海事変被害者に対する救恤 1933-1935年」『山口県立大学学術情報』7巻, 査読なし, 2014, pp. 1-11.

②④井竿富雄「同じ立場・違う認識」『七隈史学』16巻, 査読あり, 2014, pp. 67-75.

②⑤井澗裕「アジテーター市川與一郎と物語としての尼港事件」『境界研究』特別号, 査読なし, 2014, pp. 99-119.

②⑥井澗裕「地域開発と製紙産業: 樺太パルプ三国志」『Arctic Circle』92号, 査読なし, 2014, pp. 4-9.

②⑦塩出浩之「三木理史『移住型植民地樺太の形成』(書評)」『日本史研究』620号, 査読なし, 2014, pp. 67-74.

②⑧原暉之「書評 三木理史『移住型植民地樺太の形成』」『アジア経済』55巻1号 査読なし 2014, pp. 146-152.

②⑨三木理史「宇田正・畠山秀樹編著『日本鉄道史像の多面的考察』(書評)」『歴史と経済』225号, 査読なし, 2014, pp. 57-59.

③⑩Аmano, Наоки(天野尚樹), Потапова Наталья. К вопросу об исторических условиях и правовых основах миссионерской деятельности христианских конфессии на территории Сахалина и Курильских островов во второй половине XIX-первой половине XX века.(19世紀後半-20世紀前半のサハリンとクリール諸島におけるキリスト教諸派宣教活動の歴史的條件と法的基礎の問題によせて) «Свобода совести в российском и между-народном измерении» 査読なし, 2014, pp. 31-38.

③⑪井竿富雄「花田仲之助の報徳会運動: 山口県を中心に」『山口県立大学国際文化学部紀要』19号, 査読なし, 2013, pp. 19-28.

③⑫竹野学「保障占領下北樺太における日本人の活動(1920-1925)」『経済学研究(北海道大学)』62巻3号, 査読あり, 2013, pp. 31-48.

③⑬田村将人「V.N. ヴァシーリエフのアイヌ物質資料の収集過程に関する資料」『北海道開拓記念館研究紀要』41巻, 査読あり, 2013, pp. 153-168.

③⑭三木理史「南満洲鉄道の成立と大豆輸送: 駅勢圏の形成とその規定要因」『人文地理』65巻2号, 査読あり, 2013, pp. 1-22.

③⑮Wolff, David. Japan and Stalin's Policy toward Northeast Asia after World War II. "Journal of Cold War Studies. 査読あり Vol.15, no. 2. 2013.

pp. 4-29.

〔学会発表〕(計 31件)

Amano, Naoki. "Korean Networks in Russian Far East: Openness, Accessibility and Adaptive-ness." International Symposium "There Goes the Neighbourhood: Increasing Tensions in Cooperative Northeast Asia" (招待講演), 2016年12月18日, 北九州国際会議場(福岡県北九州市)

天野尚樹「上陸地・中継地・発源地: 北海道・サハリン関係のなかの稚内」アジア政経学会 2016年度秋季大会 2016年11月19日, 北九州国際会議場(福岡県北九州市)

竹野学「樺太からの日本人引揚げ: 人口動態からの接近」政治経済学・経済史学会 2016年度秋季大会 2016年10月22日, 立教大学池袋キャンパス(東京都豊島区)

兔内勇津流「露米会社と日本の北方地域」日露国際研究集会「コレクション形成史からみる日露関係史」2016年7月10日, 北海道大学(北海道札幌市)

パールイシェフ, エドワルド「本野一郎(1862-1918年)とロシア: 「戦争と平和」の時代における日本外交官の活躍」早稲田大学総合研究機構ロシア研究所研究会 2016年6月25日, 早稲田大学(東京都新宿区)

Izao, Tomio. "The Role of Japan's Intervention in Siberia in Japan's Modern History." World Counter-Revolution: 1917-1920 from a Global Perspective. (招待講演) 2016年6月10日, Herrenhauser Palace, Hanover (ドイツ・ハノーバー)

三木理史「「満洲国」期の農産物鉄道輸送: 空間支配の変化に関連して」第59回歴史地理学会大会 2016年6月4日, 城西大学(埼玉県坂戸市)

兔内勇津流「第二次世界大戦期サハリン周辺海域の航行問題」サハリン樺太史研究会例会 2016年5月21日, 北海道大学(北海道札幌市)

天野尚樹「樺太における「国内植民地」の形成: 「国内化」と「植民地化」」サハリン・樺太史研究会例会 2016年2月23日, 北海道大学(北海道札幌市)

井澗裕「サハリン軍事占領と司法: ロシア連邦極東歴史公文書館所蔵資料を中心に」第1回日本シベリア学会, 2015年11月22日, 北海道大学(北海道札幌市)

井澗裕「観光資源としての歴史遺産」樺太時代の史跡保存に関する第8回国際シンポジウム」(招待講演) 2015年10月29日, 在ユジノサハリンスク日本総領事館(ロシア・ユジノサハリンスク)

三木理史「サハリンの鉄道: その魅力と意義」樺太時代の史跡保存に関する第8回国際シンポジウム」(招待講演) 2015年10月29日, 在ユジノサハリンスク日本総領事館(ロシア・ユジノサハリンスク)

神長英輔「コンブから考えるロシア極東史」来日ロシア人研究会例会, 2015年10月3

日、青山学院大学(東京都渋谷区)

池田裕子「樺太庁拓殖学校の再編」教育史学会 2015年9月26日、宮城教育大学(宮城県仙台市)

神長英輔「露領漁業から北洋漁業へ: デンビー商会の盛衰」中国四国歴史学地理学協会 2015年度大会(招待講演) 2015年7月12日、広島大学(広島県東広島市)

Izao, Tomio. "The War of Historical Correctness?: Historical Disputes in East Asian Countries". (国際学会) The War of Historical Correctness?: Historical Disputes in East Asian Countries. 2015年6月26日, Novotel Paris Centre Tour Eiffel (フランス・パリ)

三木理史「合評会: 中山大将『亜寒帯植民地樺太の移住社会形成』」サハリン樺太史研究会 2015年3月14日、北海道大学(北海道札幌市)

三木理史「帝国日本の植民地の地域性と樺太」シンポジウム「国内植民地の比較史」2015年2月22日、同志社大学(京都府京都市)

天野尚樹「植民地・辺境・国内植民地: 樺太における「国内化」と「植民地化」の展開」シンポジウム「国内植民地の比較史」2015年2月21日、同志社大学(京都府京都市)

井瀬裕「亜港パクロフスカヤ寺院をめぐる: 北サハリン軍事占領と司法」20世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶」第2回研究会 2015年2月16日、北海道大学(北海道札幌市)

②塩出浩之「近代アジア太平洋地域における日本人の移民と植民」ワークショップ「東アジア史の視点から見た日本史」2014年12月15日、東北亜歴史財団(韓国・ソウル)

②パールイシェフ, エドワルド「北部サハリンと『イワン・スタヘーエフ商会』の実業活動(1915~1925年)」スラブ・ユーラシア研究センター・特別研究会「北サハリンの歴史と現在: 村上隆没後10年を記念して」2014年11月1日、北海道大学(北海道札幌市)

②Барышев, Э.(パールイシェフ, エ) «Первая мировая война и сахалинский вопрос (1914-1918): борьба за российские недра»(第一次世界大戦とサハリン問題: ロシアの地下資源をめぐる闘争) . Научная конференция «Мировые конфликты: глобальное и региональное измерение» 2014年10月15日, サハリン国立大学 (ロシア・ユジノサハリンスク)

②Каминага, Э.(神長英輔). «Рыбопромышленность в низовьях Амура и на Северном Сахалине, оккупированных Японией в начале 1920-х годов»(1920年代初め日本占領下のアムール河下流域における漁業) Научная конференция «Мировые конфликты: глобальное и региональное измерение» 2014年10月15日, サハリン国立大学 (ロシア・ユジノサハリンスク)

②Аmano, H.(天野尚樹) «Карафутто как внутренняя колония»(内国植民地としてのカラフト) Научная конференция «Мировые

конфликты: глобальное и региональное измерение» 2014年10月14日, サハリン国立大学 (ロシア・ユジノサハリンスク)

②井瀬裕「大正/小樽/樺太」博物館ゼミナール小樽学「小樽とサハリン島: 明治から昭和」2014年3月23日、小樽市総合博物館(北海道小樽市)

②神長英輔「樺太のロシア人 1905~1948年: 国立サハリン州歴史文書館の日本語史料から(ロシア語)」全ロシア学術会議「極東境界領域におけるロシア」(GI. ネヴェリスコイ生誕200年によせて) 2013年11月22日, チェーホフ『サハリン島』博物館(ロシア・ユジノサハリンスク)

②井瀬裕「北緯50度線と3人の旅人: 明治大正期の樺太日露国境点描」GCOEプログラム『「境界研究の拠点形成」の歩み』展開連研究員セミナー 2013年11月16日、北海道大学(北海道札幌市)

②神長英輔「生活文化圏としての環日本海: 近現代のコンプ業の歴史から考える」「21世紀東アジア<共生>の条件」新潟国際情報大学20周年記念シンポジウム 2013年11月3日, ANAクラウンプラザホテル(新潟県新潟市)

②神長英輔「コンプの旅とコンプ革命: 近現代東北アジアのコンプ業」近世史フォーラム9月例会 2013年9月28日, 新潟市歴史博物館(新潟県新潟市)

③Itani, Hiroshi. "Sakhalin, Kunasir, Yonaguni and Tsushima: Current Situation in the Japanese 'Border' Regions". Western Social Science Association: ABS (Association for Borderland Studies) 2013年4月13日, Grand Hyatt Denver (アメリカ合衆国・デンバー)

〔図書〕(計 25 件)

天野尚樹, 原暉之, 三木理史, 中山大将 樺太連盟『樺太40年の歴史: 40万人の故郷』2017(1-114, 157-238, 265-331)

Аmano, H.(天野尚樹) ほか Буки Веди社. Аболтин В.Я. Остров сокровищ: Северный Сахалин: сборник документов и материалов. (アボルチン 宝の島北サハリン: 文書史料集) 2016, 375(34-46)

井瀬裕ほか 国境地域研究センター『稚内・北航路: サハリンへのゲートウェイ』2016, 59(6-13, 26-33, 45-51, 57-58)

神長英輔, パールイシェフ, エドワルドほか 成文社『異郷に生きる: 来日ロシア人の足跡 6』2016(23-35, 131-144)

竹野学ほか 日本経済評論社『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究: 国際関係と地域の視点から』2016, 387(229-270)

竹野学ほか 北海道出版企画センター『北海道史事典』2016, 548(356-357, 399-402)

パールイシェフ, エドワルド 群像社『日露皇室外交: 1916年の大公訪日』2016, 109.

天野尚樹ほか 成文社『日本領樺太・千島からソ連領サハリン州へ』2015, 192(135-155) 塩出浩之『越境者の政治史: アジア太平洋

における日本人の移民と殖民』2015, 503.

竹野学ほか 吉川弘文館『地域のなかの軍隊 7. 植民地 帝国支配の最前線』2015, 299 (86-109)

田村将人ほか クルーズ社『オホーツクの灯り：樺太、先祖からの村に生まれて』2015, 261(227-248).

Tonai, Yuzuru ほか Routledge 社 “Voices from the Shifting Russo-Japanese Border Karafuto/ Sakhalin”. 2015, 240(80-100).

兔内勇津流(共編) サッポロ堂書店『環オホーツクの環境と歴史』3号, 2014, 101., 4号, 2015, 106.

原暉之ほか 東京大学出版会『日ロ関係史: パラレル・ヒストリーの挑戦』2015, 713(175-192)

神長英輔ほか 風響社『変容する華南と華人ネットワークの現在』2014, 506(113-141)

神長英輔ほか サハリン州政府『サハリン州: 歴史、現代、未来: 国際学術会議報告集(2012年10月17-18日)(ロシア語)』2013, 250(42-45)

神長英輔 成文社『「北洋」の誕生: 場と人と物語』2014, 278.

塩出浩之ほか 岩波書店『岩波講座日本歴史 15』2014, 306(165-201).

田村将人ほか 東京堂出版『日本とはなにか: 日本民族学の20世紀』2014, 352(55-77).

三木理史ほか 丸善出版『人文地理学事典』2013, 761(518-519)

Amano, Naoki. ほか Dalnauka. Borders and Transborder Processes in Eurasia. 2013, 249(119-132).

①ウルフ, デイビッドほか 東京大学出版会『ユーラシア世界 5: 国家と国際関係』2013, 263(207-225).

②ウルフ, デイビッドほか ミネルヴァ書房『アジア主義は何を語るのか』2013, 671(562-583).

③神長英輔ほか 山川出版社『新史料で読むロシア史』2013, 340(143-163).

④田村将人(共編) アイヌ文化振興・研究推進機構『ロシアが見たアイヌ文化: ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより(図録)』2013, 131.

⑤田村将人ほか 勉誠出版『帝国以後の人の移動: ポストコロニアリズムとグローバルイズムの交錯点』2013, 1000(209-248)

〔その他〕

ホームページ等

サハリン島の古地図

http://srcmaterials-hokudai.jp/sakhalin_map.html

サハリン島写真館

http://srcmaterials-hokudai.jp/sakhalin_photo.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原 暉之(HARA, Teruyuki)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究セン

ター・名誉教授

研究者番号: 90086231

(2) 研究分担者

井竿 富雄(IZAO, Tomio)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号: 10284465

竹野 学(TAKENO, Manabu)

北海商科大学・商学部・教授

研究者番号: 00360892

三木 理史(MIKI, Masafumi)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号: 60239209

ウルフ デイビッド(WOLFF, David)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究セン

ター・教授(2013年度まで)

研究者番号: 60435948

神長 英輔(KAMINAGA, Eisuke)

新潟国際情報大学・国際学部・准教授

研究者番号: 40596152

塩出 浩之(SHIODE, Hiroyuki)

琉球大学・法文学部・准教授(2015年度まで)

研究者番号: 50444906

池田 裕子(IKEDA, Yuko)

東海大学・札幌教養教育センター・准教授

研究者番号: 90448837

天野 尚樹(AMANO, Naoki)

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号: 90647744

兔内 勇津流(TONAI, Yuzuru)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究セン

ター・准教授(2014年度から)

研究者番号: 50271672

田村 将人(TAMURA, Masato)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸部付・主任研究員

研究者番号: 60414140

パールイシェフ エドワード(BARYSHEV, Eduard)

筑波大学・図書館情報メディア研究科

(系)・助教

研究者番号: 00581125

井濶 裕(ITANI, Hiroshi)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究セン

ター・境界研究共同研究員

研究者番号: 10419210

(3) 連携研究者 該当なし

(4) 研究協力者

中山 大将(NAKAYAMA, Taisho)

シュラトフ ヤロスラフ(SHULATOV, Iaroslav)

ポタポヴァ ナターシャ(POTAPOVA, Nataliia)